

【特集】多文化共生と「ダブルリミテッド」の現状 在留外国人が増えるにつれ、二言語の環境で育ち、その両言語で年齢相応のレベルに達していない「ダブルリミテッド」と呼ばれる子どもが急増している。帰国子女の問題は知られていたが、日本に住む外国にルーツのある子どもたちの言葉の問題は、背景がより複雑で、教育現場の懸案でもある。社会的認知もいまだ十分でない。本特集では、その現状を把握し、増えゆく日本社会の多文化共生と言語の問題について考える。

NHKを定年退職後、「子どもたちの話し言葉を育てる」というテーマで地域づくりと言葉教育を組み合わせた、オリジナリティあふれる活動を展開している山根基世さん。

子どもたちが人生を切り開いていくなかでとても重要な「隣の人と心を通わせるための言葉」をどう育てていくのか。約8年にわたり、現場で聞き続けてきた子どもたちの言葉から見えてきたこと、そして今後の言葉の教育のあり方について、話を聞いた。

### 地域社会の崩壊が 子どもの言葉を貧しくした

—NHKを定年後、山根さんは一貫して、子どもたちの話し言葉を育てることに力を注いでおられます。日常の話し言葉は暮らしのなかで自然と身につくと考えがちですが、実際には難しいのでしょうか？

山根 子どもたちの教育に関して私は門外漢だったので、まずは現場を歩いてみました。すると今の時代、家

庭は子どもたちの言葉を育てる場ではなくなっていたんですね。核家族で、屋は母子だけで生活しているとしても母と子の会話など、なにも考えなくてもできてしまっていて、言葉が足りなくても不自由しません。お腹がすいた頃にはごはんが出てくるし、「ジュース」といえばジュースが出てくる。名詞だけで暮らせるし、相手の気持ちを忖度する必要などありません。

—学校教育はどのようになってきているのでしょうか？

山根 学校現場を回ってみると、今でも国語教育は読み書きが中心です。話し言葉も大切だとわかっていますが、学校で教えているのはスピーチ、ディベート、リポートといったパブリック・スピーキング。今の子どもたちは大勢の人を前にリポートをするのが上手ですね。私が子どもの頃は、とてもできなかったと思います。でも私が今、子どもた

ちに必要だと思うのは、プライベートな場、日々の暮らしのなかで、隣の人と心を通わせる言葉です。子どもたちの日常を見ると、そういう言葉を学ぶ場がなくなっているのです。

—確かに人と人を繋ぐ日常の言葉が、子どもたちのなかで希薄になっているのかもしれない。

山根 今おきている子どもたちの問題の原因を探っていくと、「自分の気持ちを言葉で表現できない」ということが、ひとつのきっかけになっているのではないかと思うのです。自分の心のなかにある感情を他人にわかるように表現できないのは、もどかしく大きなストレスで、これができるようになるのは、とても大きなことです。そして相手の言葉を聞いて、話し手の心をちゃんと理解できる。その結果、よい人間関係を周囲に築くことができるのです。

## ◆ 巻頭インタビュー 言葉の力を信じる子どもを 育てたい

アナウンサー 山根基世氏



「コミュニケーションの場で、言葉は大きな力を持っていますね。」

**山根** 言葉が不十分で人間関係につまづくと、自分は「こういう風に生きたい」と思っても、人の協力は得にくくなります。よい人間関係がなければ、人生を切り拓いていきません。だからこそ「自分の気持ちをきちんと言葉で表現すること」

を身につけてほしい。そして、この力を身につけるときに重要なのが地域社会の存在だと思います。

「地域社会がどのような形で子どもに働きかけられるのでしょうか。」

**山根** 今は地域社会が崩壊しているといってもいい状態ですが、かつては冠婚葬祭、ことあるごとに地域内

に暮らす赤ちゃんからお年寄りまでが一堂に会して、いろんなことをやりながら、おしゃべりをしていました。子どもたちは異年齢の人々が集う場で、さまざまな話し言葉を聞き、コミュニケーションや人間関係のあり方などを学んだのですね。たとえば「うちのお母さんはおじいちゃんがいるときは丁寧語を使うけど、おじいちゃんがいなくなると、途端にタメ語になっている」とか（笑）。言葉と人間関係がセットになっているということ、実例を見ながら理解し、体で覚えることができました。これは学校では教わりません。

### 『ごん狐』が 教えてくれること

「今、地域社会の力は弱まり、子どもたちの学びの場がないですね。」

**山根** そこで地域づくりと子どもの言葉を育てる活動をセットでやりたいと思い、朗読という方法でできることを提案してまわりました。すると2013年、愛知県半田市に声を

かけていただいたんです。この年は児童文学作家の新美南吉生誕100年。彼の代表作『ごん狐』は小学校4年生の教科書に載っていて、子どもたちにもなじみがありますね。それで、半田市が運営している「新美南吉記念館」が、私たちに朗読に来てくださいと招いてくださいまし

た。  
「それでスタートしたのが「みんなでごんぎつねプロジェクト」という活動なのですね。」

**山根** 半田市内には小学校が13校あるので、各校から2名ずつ児童を出していただきました。市内には30年以上も続いている朗読グループ「ぎりんの会」があったので、20代から70代までさまざまな年代の大人の方に入ってもらい、合計34人が半年間、毎月2回ずつ集まって『ごん狐』を読みこんでいったのです。私自身も毎月二度、半田に通いましたが、最初にしっかりと趣旨説明をしました。今回のプロジェクトでは最後にみんなで朗読をするのだけけれど、うまく読むことが目的ではあり

ません。毎回、子どもと大人が一緒に過ごし、会話をします。そこに意味がありますと。

『ごん狐』を題材にしながら、大人と子どもが自然と集うかたちをつくられたのですね。

山根 そうです。毎月の集まりで



「ごんぎつねプロジェクト」ワークショップの様子

は、さまざまな年齢の人を組み合わせさせて6人くらいのグループをつくって活動します。言葉の意味を調べたり、各章ごとにタイトルをつけたり、『ごん狐』の舞台となった場所にも遠足に行きました。川を見ながら「ここで兵十ひょうじゅうというお百姓が魚を捕っていたんだね」という話ができるんですね。また、物語に出てくる「はりきり網」や火縄銃の实物を、新美南吉記念館でみんな実際に触ってみました。火縄銃というのはすごく重いのだと、子どもたちも実感して、体にしみ込ませるように『ごん狐』を理解していったと思います。

—半年間続けていくなかで、子どもたちの変化を感じることはありませんか？

山根 たえば『ごん狐』の第一章を読んでいて、「川べり」という言葉が出てきたら、小学校1年生の子が「意味がわからない」というんで

す。すると小学4年生くらいの子が白板に黒いマジックで川を書き、赤いマジックで片方を塗りながら「ここが川べりだよ」と教える。わかる子が教えてあげることも大事ですね。また「百舌鳥もず」という言葉が出てきたら、「意味がわかる人？」と聞いて、手を上げた子が発言します。「鳥の名前」。「そうね、鳥の名前ね。どんな色をしているの？ どんな大きさ？ どういう鳴き声？」と聞くと、大人もわからない。そういうものは宿題にして、毎回、みんなで調べてきます。

—すごく貴重な時間ですね。

山根 ある時、5年生くらいの男の子が私のところに来て「ただ言葉の意味を調べているだけじゃないか」と言うんです。それで私は「そうだよ。知らない言葉を全部調べて、意味がわかるということとは、とっても大事なことなんだよ」と答えました。音読と朗読とは違う。書いてあ

る文字を声に出して読むのが音読で、それは誰でもできることです。だけど朗読は、ここにある言葉の意味を全部理解し、自分のなかに取り入れてイメージし、そのイメージを聴いている人の耳だけでなく、心に届ける。「そのためには言葉の意味が全部わかっていないとできないんだよ」というと、「ふーん」とすごく神妙に聞いてくれるんです。

—山根さんの活動では、異年齢が集まって言葉を交わすというところに深い意味を持たせていますね。

山根 そうです。というのも人間はとても特殊な動物で、生まれた後、後天的に人の言葉を聞かなければ決して言語を獲得できません。たとえば、猫はニャー、犬はワン、羊は

メーと生まれた時から鳴き方が決まっています、その言葉のなかでお互いにコミュニケーションします。でも人間は8歳くらいまでの言語形成期に、多様な大人の言葉を聞いて学

習しないと、言葉を獲得することができないのです。お手本を聴いて、体に入れておくことがすごく大事なんです。だから私たちは絵本の読み語りをしたり、朗読を聞いてもらったりして、子どもたちに日本語の美しいリズムや響き、肉声の温もりを伝えて、体で覚えて感じてもらう。それが将来、その子の生涯の「言葉の財産」になってくるんです。

### 子どもの成長を信じていることが教育

—NHKを退職後、言葉教育を始めて8年。山根さんご自身も得るごことがありますか？

**山根** 実際にやってみて、つくづく思ったのですが、教育は本当に達成感のない仕事ですね(笑)。放送の仕事は、出来不出来はさておき、番組が一本完成すれば「ああ、終わった」という達成感がある。でも教育は毎回、悩むことばかりです。半田市に通っていたときも、帰りの新幹線のなかで「今日、あの子にああ

う風に言ったけれど、本当によかったのだろうか」とぐちぐち思うんです。教育というのは、すべてケースバイケース。模範解答はないのだから、その都度、迷ったり、悩んだり、つまづいたりしながら、やっていくしかないですね。

—そうですね。達成感はなくても、子どもの成長を信じるからこそ、できることだと思えます。

**山根** 「みんなでこんぎつねプロジェクト」が終了した時、お母さんたちが「子どもたちになにか言ってやってください」とおっしゃったから、私はこう答えました。「半年間、すごく楽しかったです。ありますがとう。この半年の間、私はあなたたちのなかに言葉の種を蒔きました。明日、すぐに言葉の力が伸びて、なんでもできるようになるということではないけれど、その種を大事に育てていってければ、いつかいつか、きっと自分らしい人生を切り拓く言葉の力ができますよ」と。いつかこの子たちの何かになるはずだと信じないとできない。

教育とはそういうものだなと感じました。信じる力が必要ですね。

—そして大人が自分を信じてくれている。その思いが子ども自身の力になったり、がんばろうという勇気になるのかもしれないですね。

**山根** そして、もう一つ。私は言葉の力を信じる子どもを育てたいんです。日本人の多くは「どうせ自分一人がなにを言っても無駄だ。世の中は変わらない」と最初から諦めていきますね。でも、そうじゃなくて社会に不満があれば、きちんと発言していかなければ世の中は変わりません。たとえば後輩の働く女性たちが育児と仕事を両立させるとき、「このところを手助けしてもらえると、楽に仕事ができる」「ここが大変なところだ」など、感情的にならず、論理的に、しかも人の心に届く言葉で、きちっと計算して社会に向かって発言してほしい。黙ってがまんしていたら、100年経っても世の中は変わりません。

—確かに発言することで、わずかで

も道は開き、少しでも何かが変わっていきますね。

**山根** 武器によらず、戦争によらず、言葉によって世の中を変えることができると思える子ども、言葉の力を信じる子どもを育てることが、それこそ「民主主義の基本のき」です。

—まさに教育の原点ですね。

**山根** 最終的な目標はその上にあります。自分の目でものを見て、自分の頭で考えた自分の言葉を語る子どもを育てること。自分の頭で考えないで、上から言われたことを鵜呑みにして、権威ある人の言葉に唯々諾々と従っていったとき、どんな恐ろしいことが起こったのかというのを歴史から学ぶべきですね。そのためには一人ひとりがものを考える人間になるということが一番大事です。本当にそうなのか、新聞やテレビはこう言っているけど大丈夫かと、立ち止まって考える。これができる子どもが、国中にあふれたとき、日本は信頼できる、平和な世界になると思っているんです。



—今回、弊社の特集では、さまざまな環境にいる子どもたちの言葉の問題を取り上げます。本来、可能性ある子どもが、諸事情で言葉をきちんと獲得できず、その後の人生でも選択肢が狭くなってしまふ。そのような現状を見ると、どうしたらいいのかわることもありません。

**山根** 一人でいきなり大きなことは

できません。だから私はできる範囲でこつこつと活動を続けているんですね。「地域が繋がって、子どもを育てるといふことを心がけないとだめですよ」と8年間、言い続けて、ようやく地域リーダーを育ててるまでこぎつきました。半田市で一緒に活動した人たちが、今は読み語りの機会を増やしてくれていて、本当にうれしいですね。もちろん、これが日本中に広がるまでには20年かかると思っています。ですから私も80歳すぎまでやらないと(笑)。私が尊敬する教育学の先生で大田堯おほたけいさんという方が「教育はアートだ」とおっしゃるのです。すてきな言葉だと思います。

—身近なところから、できることを少しずつ始めるだけで、確実に教育は変わりますね。

**山根** 私と同じような団塊世代にも、ぜひがんばってほしいです。

「定年後のあなたたちは教育資源

なんですよ」と常に言っています。子どもたちのそばに行つて、大人同士で話をしてもいいし、子どもに話しかけてもいい。誰でも、すぐに役に立てますし、それが子どもの言葉を育てることに繋がっていくのですから。今、子どもの言葉を育てないと、もう日本の未来はないんですよ。と言いたいですね。

—本当にそのとおりですね。言葉を紡ぐことで信じあう力となる。子どもの力を信じながら働きかけ続ける。「教育はアート」、素敵な言葉をいただきました。本日はありがとうございました。

インタビュー

公益社団法人日本フィランソロピー協会

理事長 高橋陽子

「2014年10月27日

山根基世氏オフィスにて」

## PROFILE 山根 基世 (やまね・もとよ)

1948年山口県生まれ。早稲田大学卒業後、NHKに入局。主婦や働く女性を対象とした番組、美術番組、旅番組、ニュース、ナレーションを担当。2005年、女性として初のアナウンス室長になる。2007年NHK退職後、LLP「ことばの杜」を設立。放送経験をいかして「子どものことば」を育てるための、朗読や読み語り等の活動に取り組む。2013年からは、地域づくりと言葉教育を組み合わせた独自の活動を続けている。著書に『感じる漢字』『ことばで「私」を育てる』など。2014年、初の翻訳絵本『このてはあなたのために』を出版。

URL : <http://yamane-motoyo.com/>